

サードプレイスに着目した地方中核都市における人口転出対策

A countermeasure for out-migration in local medium-size city focused on individual character and third-place creation

北海学園大学大学院工学研究科 ○正 員 竹口祐二 (Yuji Takeguchi)
北海学園大学 正 員 鈴木聡士 (Soushi Suzukii)

1. 序論

日本の総人口が減少を続ける中、地方部では人口の自然減だけではなく、都市部への人口流出、すなわち人口社会減も深刻化している。特に、生活機能の弱体化が進む地域では、“住み続けたくとも止むを得ず転出を選択する”というケースも多く、従来のような「定住意向」に基づく研究や施策展開だけでは人口転出の課題解決には至らない可能性がある。この点に対して、筆者ら¹⁾は、“住み続けられるか否か”を示す新たな指標『転出回避』を提案している。これは、「転出が必要だと思わない」から「転出が必要だと思わない」までの5段階評価からなる指標であり、当該研究において、定住意向や生活満足度等の総合的評価指標とは異なる評価構造を有することを明らかにしている。また、当該研究においては、転出回避が年齢や性別といったライフステージによって異なる評価構造を有することも明らかにし、ライフステージに合わせた定住促進策の検討が重要であることを示している。また、昨今のライフスタイルの多様化を鑑みると、個人的な生活志向が転出や居住地選択に影響する可能性も高く、そうした観点での定住促進策の検討も重要といえる。ここで、個人のライフスタイルにおいて重要と考えられる要素として、「サードプレイス」という概念がある。サードプレイスとは、アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグの著書²⁾にて、“自宅＝ファーストプレイス、職場や学校＝セカンドプレイスに次ぐ、第3の居場所”と定義されている。これは、カフェやパブ、公園等に代表され、“ゆとり・活気・コミュニティ”が存在する場所であり、都市の魅力を高める空間でもある。サードプレイスに関する研究³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾も多様であるが、そのうち久重の著作³⁾では、“ファーストプレイスとセカンドプレイスは生活上欠かせない場所であり、サードプレイスは居心地のよい場所である”と示されている。そして同時に、“日本の生活は住宅とオフィスを往復するだけで1日が終わってしまうような「心の豊かさ」や「他者との交流」に欠ける生活を送っている”とも示されている。これを踏まえると、昨今のワークライフバランスを重要視する風潮においても、ファーストプレイスとセカンドプレイスしか見えておらず、サードプレイスの重要性について認識されていないことが推察される。そして多くの人々や町においてサードプレイスとなる場所が存在していないことは、日常生活において心のゆとりを失わせ、QOL (Quality of Life) の低下、ひいては転出の選択に結びついてしまう状況が想定される。つまり、サードプレイスの有無は、人口転出問題を考える上で重要な要素となる可能性がある。しかし、このようなサードプレイスと定住意向、あるいは転出との関係を定量的に分析した既存研究は見当たらない。

そこで本研究では、地方部における定住促進策の在り方に関する示唆を得ることを目的として、ライフスタイル、とりわけサードプレイスに着目した転出回避に関する分析を行う。

2. 分析概要

本研究では、北海道岩見沢市を分析対象として、令和3年度に実施された「第6期岩見沢市総合計画の基本施策等に関する市民意識調査（以下、意識調査と略記）」のデータを分析に活用する（表1参照）。分析は、前述の先行研究¹⁾に基づき、「転出が必要だと思わない（LV5）」～「転出が必要だと思う（LV1）」からなる転出回避を目的変数とし、ライフスタイルの違いによる転出回避の評価の差異を分析する。3章では、まず年齢や性別によって転出回避の評価状況が異なることを示す。4章では、ライフスタイルに関する志向をカテゴライズするため因子分析を行い、ライフスタイルに関する6つの因子を導出する。5章では、転出回避の評価レベル毎にライフスタイル因子の差異を示し、6章ではそれらについてライフステージ別に差異を示す。最後に7章では、分析のまとめと、それらの分析結果に基づき、定住促進策に関する提言を示す。

表1. 意識調査の実施概要

実施時期	2021.10.15～2021.10.31
実施方法	郵送による配布／郵送またはWEB回答
配布数 回収数	配布数：4,000件 回収数：1,396件（回収率34.9%） 有効回答数：1,026件（有効回答率73.5%）
属性別の 有効回答数	ヤング層（18～39歳）：346人 うち男性138人／うち女性208人 ミドル層（40～64歳）：394人 うち男性187人／うち女性207人 シニア層（65歳以上）：286人 うち男性157人／うち女性129人

表2. 主な設問の項目や内容

転出回避の設問文
あなたは、進学・就職・結婚・出産・定年・退職・病気や事故など、人生の転機を迎えたとき、岩見沢市から転出する必要があると思いますか→「（転出が）必要だと思う」：LV1～LV5：「必要だと思わない」
ライフスタイルに関する設問項目
①環境配慮 ②公園緑地利用 ③合合等施設利用 ④趣味・文化活動 ⑤スポーツ実施 ⑥主観的健康感 ⑦健康意識 ⑧ボランティア活動 ⑨近隣親交 ⑩近隣声掛け ⑪地縁活動 ⑫交友関係活発 ⑬サードプレイス ⑭インターネット利用 ⑮スマホ利用 ⑯ネットショッピング ⑰まちづくり関心 ⑱市政・財政関心 ⑲地元産品購入 ⑳中心市街地利用→いずれも「全く当てはまらない」：1～5：「とても当てはまる」

3. ライフステージ別の転出回避

ここでは、本研究のKPI (Key Performance Indicator) として転出回避の評価構造等について示す。まず、図1及び表3は、転出回避と定住意向の差異を示したものである。図1より、転出回避は定住意向に比べて低評価割合が高く、表3より2変数間には有意差があることも示された。ここでは2変数が異なる指標であること、並びに、分析地域においては“住み続けたくとも住み続けられないと考える住民”が存在することを示唆している。次に、ライフステージ別の転出回避について平均値の差の検定を行った。ライフステージは、性別2区分×年齢3区分（ヤング：～39歳、ミドル：40～64歳、シニア：65歳以上）からなる6区分としている（図2・表3）。図2より、転出回避は、年齢が上がるほど評価（LV）が高くなる傾向が推察される。また、表3は、転出回避LVの平均値の差の検定に関するp値一覧を示しており、同年代間で有意差を持つのはシニアのみとなったものの、異なる年代間ではいずれも有意差が示された。このことから以降の分析、並びに定住促進策を検討する上では、ライフステージに着目することが重要といえる。

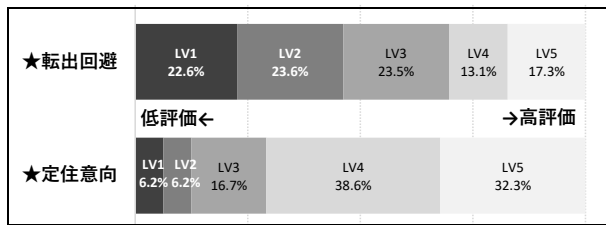


図1. 転出回避と定住意向の評価構成比

表3. 転出回避と定住意向の評価値 (LV) の差の検定

	平均値	平均差	p 値/判定
定住意向	3.844	—	—
転出回避	2.788	1.056	8.3E-74/***

* : 10%有意, ** : 5%有意, *** : 1%有意

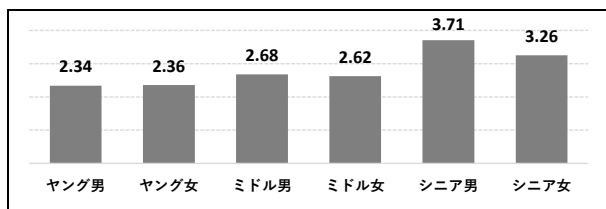


図2. ライフステージ別の転出回避LV

表4. ライフステージ別の転出回避LVの差の検定

p 値一覧	ヤング男	ヤング女	ミドル男	ミドル女	シニア男	シニア女
ヤング男	—	0.889	0.021**	0.049**	0.000***	0.000***
ヤング女		—	0.015**	0.040**	0.000***	0.000***
ミドル男			—	0.640	0.000***	0.000***
ミドル女				—	0.000***	0.000***
シニア男					—	0.004***

* : 10%有意, ** : 5%有意, *** : 1%有意

4. ライフスタイルに関する因子分析

ここでは、ライフスタイルの違い、とりわけサードプレイスの有無に着目した分析について示す。本節では、意識調査に組み込まれたライフスタイルに関する設問に基づいた因子分析について示す。これは、説明変数に設定した設問データについて、その評価（数値）を決定づけるいくつかの“因子”を導く分析手法である。表5及び表6に因子分析の結果を示す。

表5は、因子分析によって導かれた因子の固有値及び寄与率を示している。因子分析では、一般的に固有値1.00以上の因子を対象とするが、木下⁷⁾は必ずしも1.00を上回る必要がなく、その近傍の値の因子も考慮してよいとしている。加えて、因子6を含むと累積寄与率が60%を超えることから、本分析では、因子6までを対象の因子に設定した。

表6は、因子分析によって導出されたライフスタイルに関する特徴ある6つの因子について示している。本研究では、これらのライフスタイル因子にそれぞれ「デジタル因子」、「趣味活動因子」、「近隣交流因子」、「奉仕活動因子」、「地域配慮因子」、「サードプレイス因子」と名付けを行い、分析に用いる。前述の「サードプレイス」の変数は、他のライフスタイル因子とは独立し、因子6となっている。

表5. 因子分析・固有値

因子№	固有値	寄与率	累積寄与率
1	4.06	23.91%	23.91%
2	2.63	15.46%	39.37%
3	1.22	7.17%	46.55%
4	1.09	6.43%	52.98%
5	1.00	5.88%	58.86%
6	0.96	5.65%	64.50%
7	0.86	5.09%	69.59%
8	0.73	4.30%	73.89%
9	0.70	4.10%	77.99%
10	0.67	3.96%	81.96%
11	0.55	3.26%	85.21%
12	0.52	3.04%	88.26%

表6. 因子分析・因子負荷量

因子負荷量	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
	デジタル因子	趣味活動因子	近隣交流因子	奉仕活動因子	地域配慮因子	サードプレイス
ネット利用	0.86	0.02	-0.13	0.04	0.03	-0.01
スマホ利用	0.77	-0.08	0.04	0.00	0.00	-0.04
ネットショッピング	0.72	-0.02	-0.02	-0.01	-0.03	0.05
スポーツ実施	-0.12	0.82	-0.05	0.14	-0.13	0.00
健康意識	-0.04	0.69	-0.06	-0.15	0.30	-0.02
趣味・文化活動	0.11	0.44	0.21	0.09	-0.04	0.04
近隣親交	-0.16	-0.01	0.78	-0.04	0.02	-0.04
交友関係活発	0.07	0.04	0.64	-0.02	-0.15	0.12
近隣声掛け	0.05	-0.04	0.46	0.16	0.27	-0.06
ボランティア	0.02	0.11	-0.05	0.79	-0.12	0.02
地縁活動	-0.01	-0.08	0.05	0.74	0.11	-0.05
地元産品購入	-0.07	0.02	-0.08	0.14	0.53	0.04
環境配慮	0.04	0.00	0.01	-0.08	0.51	0.02
サードプレイス	-0.03	-0.02	0.03	-0.02	0.03	0.89

5. ライフスタイルと転出回避の関係分析

転出回避の評価（LV）間において、前節で示した各因子の因子得点の差異を分析する。図3に因子得点のグラフを示す。図3より、「デジタル因子」は、転出回避LVが高くなるほど因子得点が低くなる傾向が窺える。「趣味活動因子」、「近隣交流因子」、「奉仕活動因子」、「地域配慮因子」、「サードプレイス因子」は、いずれも転出回避LV5において因子得点が最大値となり、転出回避LVが高くなるほど因子得点が高くなる傾向が窺える。さらに、これらの因子得点について、転出回避LV間での平均値の差の検定を行った。表7に、各因子得点に関する転出回避LV5とLV1～LV4との平均値の差の検定結果のp値を示す。表7より、「デジタル因子」の因子得点は、LV5がLV1～LV4全てに対して有意に低く、「デジタル生活の傾向が高い住民は転出回避LVが低い」という傾向の有意性が示された。同様に「近隣交流因子」「奉仕活動因子」「地域配慮因子」の因子得点は、LV5がLV1～LV4全てに対して有意に高く、「デジタル因子」と同様に前述の傾向の有意性が示された。一方で、「趣味活動因子」では、対LV3、対LV4でのみ有意となり、「スポーツ等の趣味活動を盛んに行う住民は転出回避LVが高い」とは言えない。また、「サードプレイス因子」では、対LV1でのみ有意となり、「サードプレイスを持つ住民は転出回避LVが高い」という傾向はあまり強くないといえる。これらの結果から、1) ネット利用などのデジタル生活の傾向が高い住民は転出回避LVが低い、2) 友人等との交流が活発な住民は転出回避LVが高い、3) ボランティア活動等を積極的に実施する住民は転出回避LVが高い、4) 地元産品購入等の地域への配慮が深い住民は転出回避LVが高い、という6つの傾向が示唆される。

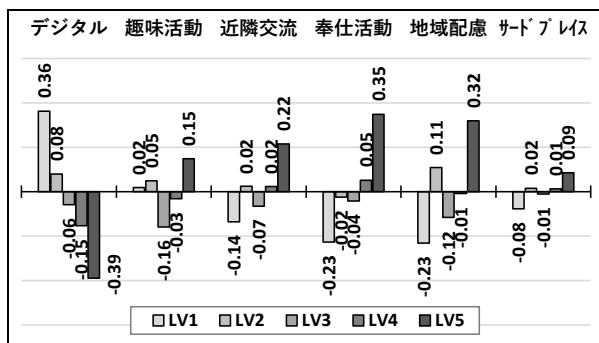


図3. 転出回避LV別のライフスタイル因子得点

表7. 転出回避LV間の因子得点の差の検定 (p値)

LV5との差	LV1	LV2	LV3	LV4
デジタル因子	0.000***	0.000***	0.000*	0.020**
趣味活動因子	0.144	0.263	0.001***	0.079*
近隣交流因子	0.000***	0.027**	0.001***	0.054*
奉仕活動因子	0.000***	0.000***	0.000***	0.003***
地域配慮因子	0.000***	0.007***	0.000***	0.000***
サードプレイス	0.071*	0.435	0.281	0.481

* : 10%有意, ** : 5%有意, *** : 1%有意

6. ライフステージ別のライフスタイルと転出回避

6.1 年齢・性別の属性に着目した分析

5章の分析では、「ライフスタイルの違いが転出回避に対して有意な影響を有する」という仮説に基づいた分析を行い、「デジタル因子」「近隣交流因子」「奉仕活動因子」「地域配慮因子」「サードプレイス因子」において仮説が立証された。一方で、例えば「デジタル因子」が高いほど転出回避LVが低いという傾向は、デジタル世代ではない高齢者の転出回避LVが高いことによるものであると推察されるため、転出回避に影響を持つライフステージに基づいて分析対象を切り分け、同様の分析を行う必要があるといえる。

そこで本節では「ライフステージの違いによって、転出回避に影響するライフスタイルの有り様が異なる」ことの検証を行う。表8に、各ライフステージ・ライフスタイル因子に関して、転出回避のLV5との有意差の有無を示す。これは、平均値の差の検定の結果全てを示すことが紙面上困難なため、代替として作成したものであり、最も高いLV5との有意差の有無から、転出回避に対するライフスタイル因子の影響を考察する。

表7より、以下のことが推察される。ヤング男では、「サードプレイス」の因子得点に関して、転出回避LV5がLV1とLV3に対して有意に高いことから、「サードプレイスを持つヤング男は、転出回避LVが高い」ことが示唆された。同様に、ヤング女では「近隣交流」「地域配慮」「サードプレイス」に関して因子得点が高いほど転出回避LVが高い、ミドル男では「趣味活動」「近隣交流」「奉仕活動」に関して因子得点が高いほど転出回避LVが高い、ミドル女では「奉仕活動」「サードプレイス」に関して因子得点が高いほど転出回避LVが高い、シニア男では「サードプレイス」に関して因子得点が高いほど転出回避LVが高い、シニア女では「デジタル」に関して因子得点が高いほど転出回避LVが低い、ことが推察される。以上より、ライフステージの違いによって、転出回避に影響するライフスタイルが異なること、特にサードプレイスの有無が多く属性で転出回避にポジティブな影響を有することが示唆された。

表8. ライフステージ別の因子得点に関する差の検定 (LV5と有意差のあるLV一覧)

	ヤング男	ヤング女	ミドル男	ミドル女	シニア男	シニア女
デジタル因子	—	—	—	LV4	—	LV2 LV4
趣味活動因子	—	LV1~4	LV1	LV3	—	—
近隣交流因子	—	LV1~3	LV1~3	—	—	—
奉仕活動因子	—	—	LV1~3	LV1	LV2	—
地域配慮因子	—	LV1~4	LV3	LV1 LV3	—	—
サードプレイス	LV1 LV3	LV1~4	—	LV1 LV3 LV4	LV1	—

6.2 世帯属性に着目した分析

続いて、世帯属性に着目した同様の分析を行った。結果を表9に示す。表9より以下のことが推察される。一人暮らしヤングでは、「サードプレイス」の因子得点に関して、転出回避 LV5 が LV1~LV4 全てに対して有意に高いことから、“サードプレイスを持つ一人暮らしヤングは、転出回避 LV が高い”ことが示唆された。同様に、一人暮らしヤングでは、「サードプレイス」の他に「近隣交流」に関して因子得点が高いほど転出回避 LV が高い、一人暮らしシニアでは「サードプレイス」に関して因子得点が高いほど転出回避 LV が高い、夫婦のみミドルでは「趣味活動」「近隣交流」「奉仕活動」「サードプレイス」に関して因子得点が高いほど転出回避 LV が高い、2 世代子ありでは「近隣交流」「奉仕活動」「サードプレイス」に関して因子得点が高いほど転出回避 LV が高い、ことが推察される。以上より、世帯属性の違いによって、転出回避に影響するライフスタイルが異なること、特にサードプレイスの有無が、重点対象とした4つの世帯属性全てにおいて、転出回避にポジティブな影響を有することが示唆された。

以上、5章及び6章1節・2節の分析結果より、“ライフスタイルの違い、とりわけサードプレイスの有無は、転出回避に対して有意な影響を有すること”、“ライフステージや世帯属性の違いによって、転出回避に影響するライフスタイルの有り様が異なること”は立証されたといえる。この分析結果及び考察より、定住促進策を検討する上では、ライフステージや世帯属性を踏まえて、ライフスタイル、特にサードプレイスの有無に着目することが重要であることが示唆された。

表9. 世帯属性別の因子得点に関する差の検定 (LV5と有意差のあるLV一覧)

	一人暮らしヤング	一人暮らしシニア	夫婦のみミドル	2世代子あり
デジタル因子	LV3	—	—	—
趣味活動因子	—	LV2	LV1	LV3
近隣交流因子	LV2 LV3	—	LV1 LV2	LV1 LV3
奉仕活動因子	—	—	LV1~3	LV1 LV3
地域配慮因子	—	LV2	—	LV1 LV3
サードプレイス	LV1~4	LV1	LV1~3	LV1 LV3

7. まとめ

本研究では、『転出回避』を主たる分析指標として、ライフステージ、世帯属性、ライフスタイルといった個人特性に着目して、地方部の中規模自治体における定住促進策の在り方に関する示唆を得ることを目的として分析を行った。その結果“ライフスタイルの違い、とりわけサードプレイスの有無は、転出回避に対して有意な影響を有すること”、“ライフステージや世帯属性の違いによって、転出回避に影響するライフスタイルの有り様が異なること”が明らかとなった。これらの結果は、定住促進策を検討する上で有益な示唆を有しており、本研究で新たに得られた知見である。

またこれらの結果に基づき、地方部の中規模自治体における定住促進策として以下の提言を示す。1) ヤング層に対しては、サードプレイスづくりを支援する施策を進める、2) ミドル層に対しては、ボランティアや地縁活動などの機会創出を進める、3) シニア層に対しては、特に男性や一人暮らし世帯に対して、サードプレイスづくりを支援する施策を進める、4) 一人暮らしヤング、夫婦のみミドル、2 世代子あり世帯などに対しては、近隣同士の関わりづくりやサードプレイスづくりを支援する施策を進める。そして具体的な施策として、特にサードプレイスづくりとしては、カフェ・公園・交流施設などの空間づくりと併せて、イベント等の交流機会創出も重要と考えられる。最後に、今後の課題として、各ライフスタイル因子に基づく多変量解析の実施や、転出回避 LV の高い住民におけるサードプレイスの実態調査等により施策検討のエビデンスを深めるなど、発展的な研究等が求められる。

【参考文献】

- 1) 竹口祐二・鈴木聡士 (2021), 「「定住意向」と「転出回避」の2軸分析と転出回避施策の方向性検討に向けた基礎的研究」, 『都市計画論文集』, 56巻3号, pp.1045-1052
- 2) レイ・オルデンバーグ (1989), 「The great good place:Cafes,coffee shops,community centers,beauty parlors,general stores,bars,hangouts,and how they get you through the day」,Paragon House Publishers
- 3) 久重哲之介 (2007), 「都市にサードプレイスを創る」, 『アーバンスタディ』, vol46, pp.1-199
- 4) 山田広明・小林重人 (2016), 「個人志向と社会志向が共存するサードプレイスの形成メカニズムの研究」, 『情報処理学会論文誌』, vol57, №3, pp.897-909
- 5) 畠山雄豪・丹羽由佳理・佐野友紀・菊池雄介・佐藤泰 (2015), 「立地環境および利用者傾向が行動分析に与える影響-行動観察調査からみたカフェのサードプレイス利用分析-その1-」, 『日本建築学会計画系論文集』, vol80, №711, pp.1067-1073
- 6) 片岡亜紀子・石山恒貴 (2017), 「地域コミュニティにおけるサードプレイスの役割と効果」, 『地域イノベーション』, vol9, pp.73-86
- 7) 木下栄蔵 (1995), 「わかりやすい数学モデルによる多変量解析入門」, pp.141-166, 近代科学社